

# 國立台灣大學社會科學院國家發展研究所

## 107 學年度博士班入學考試試題

科目：日文

請將下列文章翻譯成中文，並將畫線處的詞彙抄寫在答案卷上標注假名。

### (一) きょうだいリスク化社会 新たな「世代内格差」が生まれる

無職の弟、非婚の姉……。

雇用不安や非婚化で、自立できない大人たちが増えている。高齢の親に代わって彼らのセーフティーネットになるのは、同世代のきょうだいだ。だが、きょうだいを支え続けることで、自分や子どもの将来が<sup>①</sup>危うくなる恐れもある。

少子化できょうだいの数も減るなか、老親介護をどう乗り切るかというステージを飛び越え、さらにその先に横たわるリスクとして「きょうだい同士の扶助・援助・介護」という新たな課題が見えてきた。ある程度は年金に守られた親世代のサポートとは違い、ほぼ「同世代」であるきょうだいの将来的なサポートについては見えにくい。親が全面的に援助してきた<sup>②</sup>独り身の子ならば、今度はきょうだいに「親亡き後、親になり代わってそれまで親がしてきたような援助を続けられるのか」が問われてくる。

(中略)

従来、家族のセーフティーネットといえ、代表格が「配偶者」「子ども」であった。ここにきて、新たなセーフティーネットとして<sup>③</sup>浮上してきたのが「きょうだい」だ。自立できないきょうだいを「ほぼ同世代の別のきょうだい」がどう支えていくか。雇用不安が広がり、非婚化で単身者が急増し、少子高齢社会の真ただ中にいる私たちが新たに直面する社会課題として問題提起している。さらに見方を変えれば、「世代内」の格差問題でもある。

どちらか一方のきょうだいが他方を<sup>④</sup>「丸抱え」した場合に、共倒れしてともに<sup>⑤</sup>困窮する事態も考えられる。家族や介護を専門とする社会学者の平山亮さんは、こう指摘している。

「日本の社会保障の仕組みは、『依存状態』のきょうだいを支えることができるようには、必ずしもできていない。『依存状態』のきょうだいに対する他のきょうだいのジレンマは、家族主義の『舞台』の上だからこそ起こっている。言い換えれば、これはきょうだいに対する『気の持ちよう』の問題などではない。『舞台』の上に『あるべきもの』がないことによる、構造的な問題なのです」

「きょうだい」をリスク化させないために、私たちの社会ではそもそも家族主義ですべてを支えるべきなのか、だとすればその「舞台」に何をを用意しなければならないのか。新たな構図を描いていくべき時期に差しかかっている。

(翻訳：50%、振り仮名：5%)

\*<https://news.yahoo.co.jp/feature/105>

## (二) 中国、経済格差のひずみ 「留守児童」6000万人の実態

親が都市部に出稼ぎに行き、農村部に取り残された、「留守児童」と呼ばれる子どもたちが中国で深刻な社会問題になっている。親から離れて暮らしていることで、経済的、心理的な問題を抱える子どもたちも多い。中には子どもたちだけで暮らさなければならず、自殺を選ぶという痛ましい事件も起きた。

両親の出稼ぎによって、農村に取り残された「留守児童」の数は増加する一方だ。その数、6000万人。中国の総児童数の20%にも上る。

中国で留守児童をテーマにフィールドワークを行う九州保健福祉大学の登坂学准教授は、歴史的な経緯を次のように説明する。

「1978年に始まった鄧小平による改革開放は、先に豊かになれる者から豊かになろうという『先富論』を<sup>⑥</sup>旗印にしていました。そのため大都市や沿海省にある経済特区に産業や人口が集中し、製造業やサービス業を担う<sup>⑦</sup>人手が不足することになり、農村部から出稼ぎにくる労働者が増えていったわけです」

(中略)

出稼ぎに行く両親は子どもを連れていくことはできない。なぜなら、農村部の子どもは原則、都市の学校に入学することができないからだ。

その理由は「都市戸籍」と「農村戸籍」という中国独自の戸籍制度の存在だ。都市戸籍と農村戸籍は基本的に変更ができず、教育や住居、医療、福祉などで制約があり、大きな隔たりを生んでいる。この断絶が留守児童の増加に<sup>⑧</sup>拍車をかける。

一部の地区では教育格差の<sup>⑨</sup>是正に乗り出し、農村部の児童を積極的に受け入れる動きも見られるが、生活費や教材費などが負担できず、中退を<sup>⑩</sup>余儀なくされてしまうこともある。

(翻訳：40%、振り仮名：5%)

\*<https://news.yahoo.co.jp/feature/66>